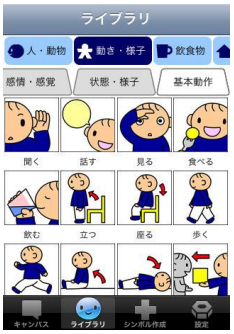
NO.22
大阪府立西淀川支援学校
支援部

情報ボックス

令和元年度第四回目の情報ボックスです。前回は「支援機器」について発行しましたが、今回は実践編をお伝えします。

ドロップトークアプリを使った取り組み

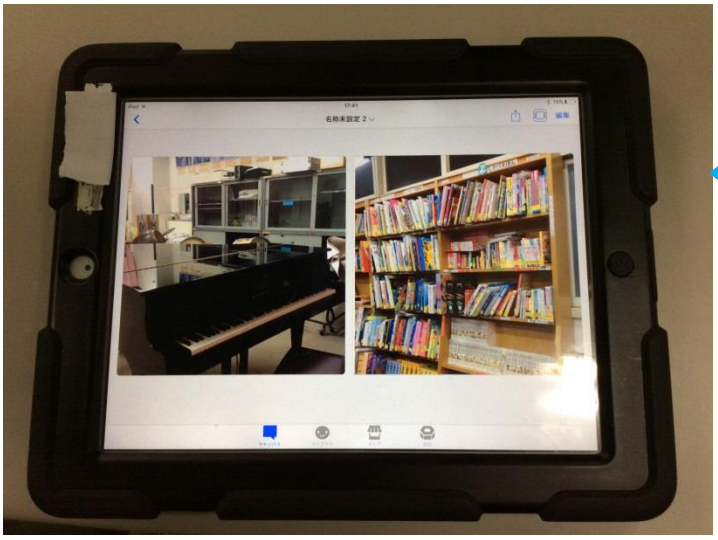


【目標】
・行きたい場所を伝えることができる。

【子どもの特性】
・不器用さはあるが、手指を動かしてタブレット端末を操作することができる。
・言葉でのコミュニケーションは難しく、要求はあるが明確に表出できない。

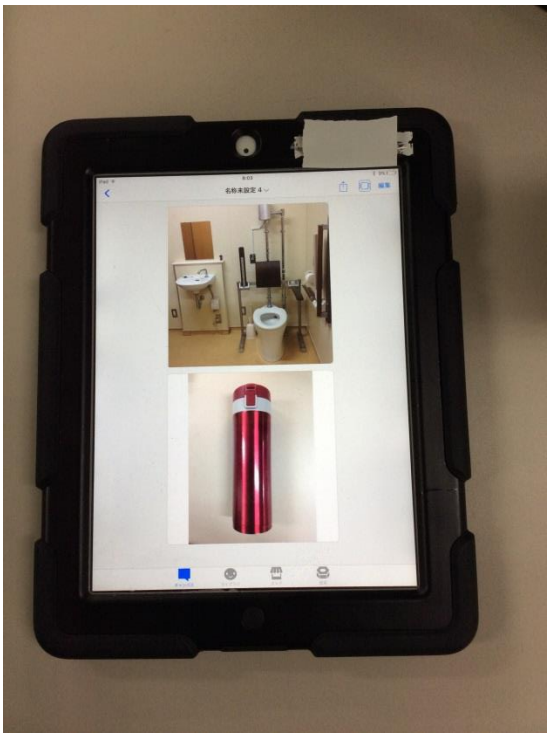
【指導の内容と手立て】
・アプリ内に図書室と音楽室の写真を入れ、提示しながらどちらに行きたいか質問をし、本人がボタンを押したらその場所へ行く。
・ボタンを押すことで好きな場所に行くことができるといったやりとりを繰り返し、成功体験を重ねることで要求表出の定着を図る。

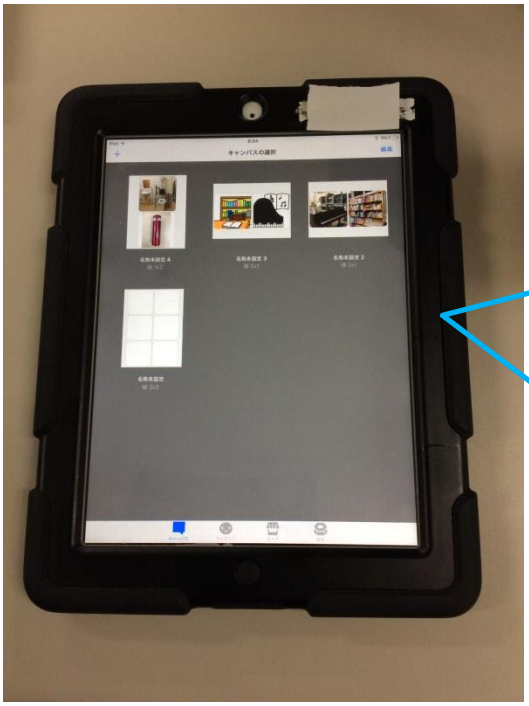
【今後の展望】
・行きたい場所を選んで伝えることが定着してきたら、お茶を飲むことやトイレに行くなどの要求の表出に繋げていきたい。



ライブラリにさまざまなシンボルが入っているが、今回は実際の子どもから見た音楽室と図書室の写真を使用する。
シンボルにはそれぞれ決められた音声が設定されているが、自分の声で入力したり、その場の写真を撮って加えたりすることもできる。

ドロップトークアプリを使って伝えることに慣れてきたら、お茶とトイレの要求表出を目標として活用していく。





使用目的に合わせて、さまざまなカードやキャンパスを簡単に作成することができる。
写真や絵カードを手軽に作成でき、文字カードも挿入すると簡単な文書を作成できる。

トーキングエイドアプリを使った取り組み

【目標】
・質問に対し、自分の気持ちを簡潔に答えられるようになる。
・タブレット端末等を使用し、朝の会で給食メニューを伝えることができる。

【子どもの特性】
・日常生活の中で使われるような言葉は概ね理解している。
・指でタブレット端末を操作することができる。

【手立て】
・三語文の答えやすい質問や、興味・関心のある身近な話題を使い気持ちや考えを引き出す。
・車いすにタブレット端末を固定し、いつでも一人で簡単に操作ができるようにした。

【様子や変化】
・画面をタッチする際の誤操作が少しずつ減り、入力速度が上がった。
・教師が側に付かない状況でも、自分でタブレット端末を操作して発表することができるようになった。
・学習や休み時間の中で、タブレット端末を使って意欲的に自分の気持ちを伝えようとするようになった。

給食メニュー表を確認しながら、入力したい文字をタッチしてひとつずつ入力していく。

改行を使いながら作成するが、漢字は使用できない。

タブレット端末を手に持って操作することが難しいので、アームで車いすに固定した。

画面の見えやすさや操作のしやすさに合わせて角度や高さを調整することができる。

まとめ

支援機器を活用することは、児童生徒のコミュニケーションの幅を広げる有効な手立てになると思います。しかし、活用する中で気をつけなければならない点があります。例えば実態を考慮せずに機器を使用してしまったり、機器を使用することが目標となってしまったりすることです。児童生徒の実態や場面に合わせて取り入れ、相手に「伝わる」という成功体験を増やすことが大切です。子どもたちの反応を見ながら、さまざまな支援機器を使った指導をお試しください。